

令和2年度 かながわの遺跡展

# 相模川 遺跡紀行

～3万年のものがたり～



## ごあいさつ

私たちは、日ごろどの程度「川」を意識しているでしょうか。穏やかに流れる川は、水道水や農業用水といった私たちの暮らしの重要な部分を支えています。普段は橋を渡るときや河川敷で目にする程度で、川のことをいつも気にかけている人は少ないでしょう。しかし、100年ほど前までは、川は日々の暮らしに欠かせない水の源であり、様々な物資や人を運ぶ交通路であり、そしてまた兩岸の往来を妨げ、時には家や田畑を押し流す恐ろしいもので、人はその存在を無視することはできませんでした。

本年度のかながわの遺跡展では、神奈川県内最大の河川である相模川<sup>さがみがわ</sup>の流域の遺跡をテーマとしました。相模川は、富士五湖<sup>ふじごこ</sup>のひとつである山中湖<sup>やまなかこ</sup>を水源とし、丹沢<sup>たんざわ</sup>の山麓を潤しながら相模平野<sup>さがみへい</sup>へと流れ出て、相模湾<sup>さがみわん</sup>へと注ぎます。その流れは数多くの動植物を支えており、流域の生態系を豊かにしています。私たち人間もまたその例外ではなく、相模川の流域には人々の活動の痕跡が遺跡として数多く残されました。本展示では、はるか旧石器時代から始まり、3万年以上にわたって相模川のほとりで生きてきた人の歩みを見ていきます。この展示が、はるか昔から私たちと川とが織りなしてきた歴史に思いを巡らせるきっかけになれば幸いです。

令和2年12月

神奈川県教育委員会  
神奈川県立歴史博物館  
厚木市教育委員会

## 目次

はじめに……………	1	コラム2 古代の道……………	16
1 川との暮らしのはじまり……………	4	4 川のそばの武士たち……………	18
コラム1 さがみ縦貫道路の発掘調査……………	8	コラム3 川で運ぶ、川を渡る……………	22
2 川のほとりで暮らし始めた人々……………	9	5 にぎわう川から川ばなれへ……………	24
3 古代のかながわと相模川……………	14	おわりに……………	28

## 例言

- 本図録は、令和2年度 かながわの遺跡展『相模川 遺跡紀行～3万年のものがたり～』の展示図録です。
- 本展示会は、神奈川県教育委員会(埋蔵文化財センター)・神奈川県立歴史博物館・厚木市教育委員会の共同主催によるものです。
- 展示会場と会期は次のとおりです。  
【厚木会場】 あつぎ郷土博物館 令和2年12月24日～令和3年1月24日 休館日:12月28日～1月3日  
【横浜会場】 神奈川県立歴史博物館 令和3年2月6日～3月7日 休館日:月曜日、2月12日・16日・24日
- 本図録に掲載した出土品等の所蔵・保管先については、神奈川県教育委員会所蔵のものは省略しています。
- 相模川の山梨県内での名称は「桂川」ですが、本図録では相模川の本流全体を「相模川」と表記しています。
- 本展の企画・図録作成は、神奈川県立歴史博物館(担当 丹治雄一)、厚木市教育委員会(担当 佐藤健二・安藤広子)の協力と、神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課各員の助言を得て、同課中村町駐在事務所[埋蔵文化財センター]の丸吉繁一が行いました。  
なお、遺構名称等の表記については、原則として報告書等の記載に従っています。

## 協力機関・協力者(各五十音順、敬称略)

綾瀬市教育委員会、海老名市教育委員会、海老名市立郷土資料館「海老名市温故館」、海老山總持院、神奈川県立公文書館、神奈川県立津久井湖城山公園、株式会社玉川文化財研究所、公益財団法人かながわ考古学財団、相模原市教育委員会、相模原市立博物館、史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館「旧石器ハテナ館」、茅ヶ崎市教育委員会、都留市教育委員会、西桂町教育委員会、平塚市教育委員会、平塚市博物館、ミュージアム都留、山梨県立考古博物館 網倉邦生、五十嵐睦、池下寛人、池田 治、伊東はるか、内田真一郎、押方みはる、小野映介、柏木善治、加藤久美、河本雅人、小林清松、齋木秀雄、新宮崇弘、中島圭一、滑川未来、禰亙田佳男、畠中俊明、服部浩平、宮坂淳一

## はじめに

相模川は、神奈川県内で最大の河川です。まず、この川のなりたちと、その流域全体の様子を見てみましょう。

### ▶相模川のなりたち

相模川が形成されたのは約500万年前とされ、現在の丹沢山地と関東山地に挟まれた部分に形成された谷が原形となっています。約50万年前ごろまでは東へと流れ、多摩川と合流していましたが、やがて現在のように南に屈曲して相模湾へ流れるようになりました。そして相模川の堆積物によって相模野台地が形づくられ、さらに川の下刻作用によって河岸段丘が形成されていきます。地球の気温が低下する氷期には、海面が大きく低下したことで、相模川の河床も低下し、河口付近の標高は今より90mも低かったことがわかっています。

約15,000年前には氷期も終わり、縄文時代になると、温暖化によって逆に海面が上昇してきます。約6,000年前には、現在の寒川町付近にまで海が入り込んでいましたが、その後海岸線はゆっくりと後退していき、下流域の両岸に広がる平野には相模川の運ぶ砂礫によって自然堤防が発達します。また、海岸付近では海からの風により砂丘が列状に形成されました。これらの河岸段丘面や自然堤防・砂丘は、現代にいたるまで人々の生活の場となっています。



1 相模川と本流沿川の市町村

### 2 本展示の関連遺跡とその時代(年代は概数)

33,000年前	16,000年前	2,500年前	1,700年前	1,300年前	800年前	400年前	150年前
旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良/平安	鎌倉/室町/安土桃山	江戸	明治/大正/昭和
津久井城(馬込地区) 田名塩田・小保戸 田名向原 大保戸	川尻・川尻中村・原東 畑久保西・はじめ沢下	中野桜野 河原口坊中 社家宇治山	倉見川端 河原口坊中・宮山中里 桜樹古墳群	宮山中里・中野中里 河原口坊中・戸田小柳 相模国府・相模国分寺	旧相模川橋脚 河原口坊中 跡堀・社家宇治山	津久井城・上ノ町 東町 代官守屋佐太夫陣屋 社家宇治山	川尻 四大縄 河原口坊中





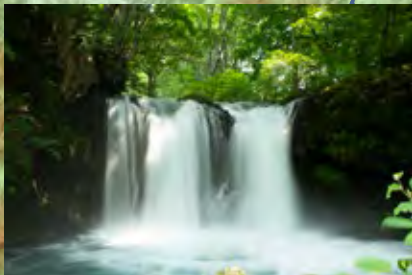
③ 田原の滝(都留市)



④ 国指定名勝猿橋(大月市)



⑤ 龍門峡(上野原市)



② 鐘山の滝(富士吉田市・忍野村)



① 相模川のはじまり(山中湖村)



### ▶相模川の地形

相模川の全長は約109 kmです(国土交通省の公表値)。富士五湖のひとつである山梨県の山中湖(標高982 m)を水源とし、忍野八海や河口湖などの水系と合流しながら、富士山の溶岩流地帯を北へと流れていきます。現在、相模川の本流には2つの滝がありますが、これらは富士溶岩流の末端部に形成されたものです。北東方向へと流れてきた相模川は、大月市付近で関東山地にぶつかると、丹沢山地を取り巻くように東へと流れを変えます。山梨・神奈川県境手前の上野原市で川幅を広げ、相模湖・津久井湖の二つのダム湖を経て、相模原市緑区小倉で南へと流れを変えると、川の両岸も山地から台地へと変わります。

富士山







⑥ 相模ダム(相模原市)



⑦ 津久井湖(相模原市)

-  自然堤防
-  砂丘・砂州

厚木市・座間市付近からは両岸に相模平野が展開し、海に向かって景観が大きく広がります。両岸に自然堤防帯を発達させながら流下した相模川は、最下流部の砂州・砂丘地帯を抜けて太平洋に注ぎ込みます。

相模川は、富士溶岩→山地→台地→平野→砂丘と、多様な地形を通り抜けているのです。



# 1 川との暮らしのはじまり

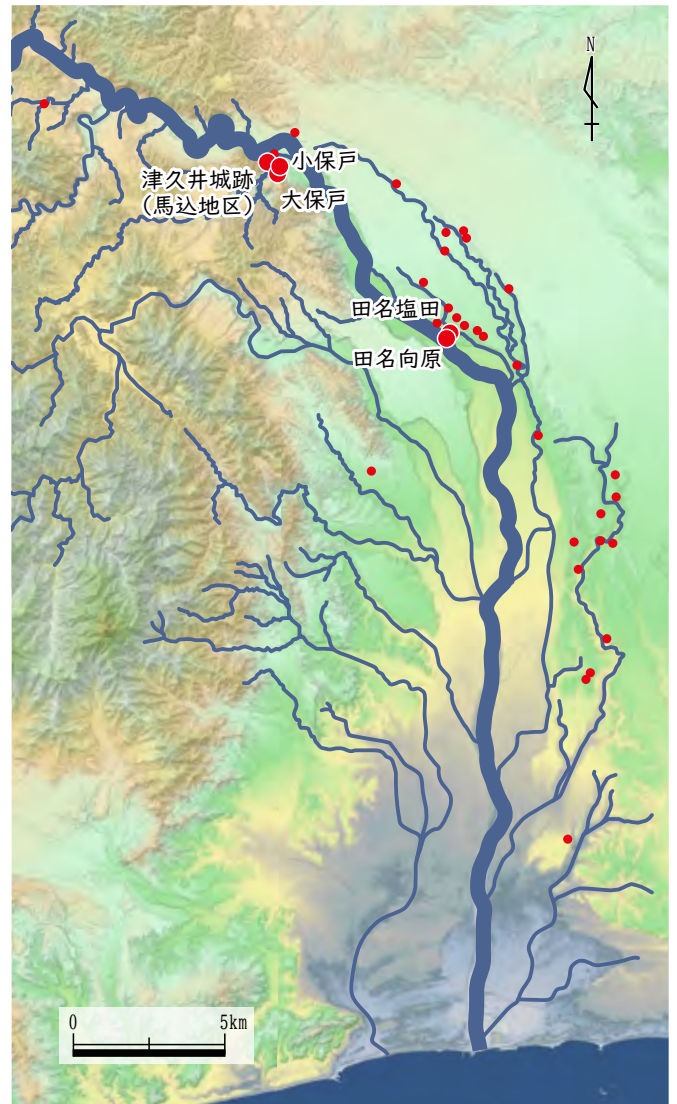
## ▶川と人の歴史のはじまりー旧石器時代ー

相模川（本流）の流域で現在のところ最も古い遺跡は、津久井城跡（馬込地区）で見つかった約 33,000 年前の後期旧石器時代のものです。

この遺跡では、相模川上流部で調達できる凝灰岩を素材とする石斧づくりを行っていたほか、伊豆諸島や伊豆半島、長野・山梨県域で採取できる黒曜石や水晶を素材としたナイフ形石器・台形様石器などの鋭利な刃物も出土しています。人々は、それぞれの石器の用途に合った石材を選択し、必要に応じて遠くの石材を入手していました。

津久井城跡（馬込地区）の遺跡の様相からは、少人数で遊動生活を送りながら、時に大人数で集まって共同で狩りや石器づくりを行い、石材産地などの情報を交換していた様子が見え、既に地域内での集団社会が形成されていたと推定されます。

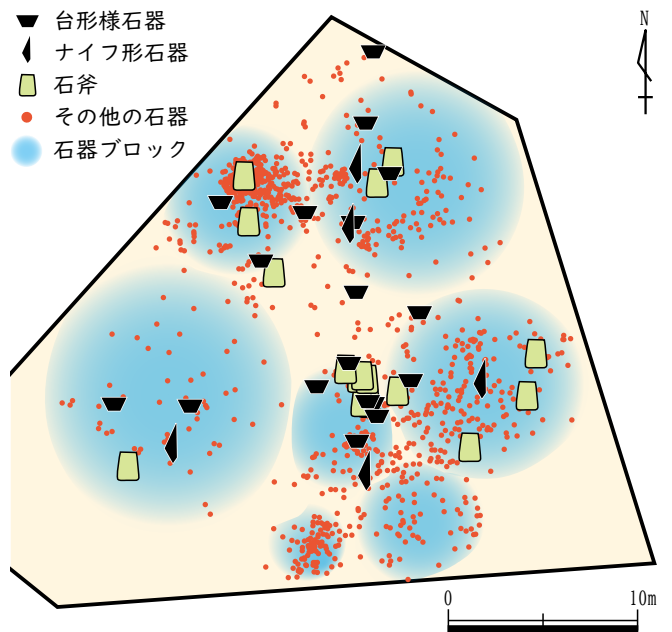
相模川左岸に広がる相模野台地には、旧石器時代の遺跡が多く分布しています。相模川の形成した谷や河岸段丘面は、当時の人々がこうした日々を送り、また他地域へと移動するルートのひとつでもありました。



4 相模川周辺の旧石器時代の主な遺跡



5 津久井城跡(馬込地区)で出土した石器



6 津久井城跡(馬込地区)で確認された石器の分布状況

た な し お だ

## 田名塩田遺跡群の黒曜石原石

相模原市中央区の田名塩田遺跡群では、こぶし大ほどの黒曜石の原石が9つまとまって出土しました。これらはすべて長野県の霧ヶ峰（星ヶ塔）産のもので、石器として使用するために持ち帰ってきた原石を、まとめて保管していたものと考えられます。

旧石器時代の人々は定住せず、狩猟や食料採集を行いながら、季節によって一定の地域内を移動する生活をしてきたと考えられますが、その移動サイクルの中に石材の調達も組み込んでいたようです。



7 黒曜石原石の出土状況  
(相模原市立博物館所蔵・相模原市指定文化財)



8 相模川中流域からみた黒曜石産地

た な わ かい は ら

## 田名向原遺跡

田名塩田遺跡群中の田名向原遺跡では、およそ21,000年前の住居と考えられる遺構が見つかりました。この遺構は、多数の丸い礫（石）で円形に囲んだ中に12の柱穴が並び、さらにその内側で炉が見つっています。礫で囲まれた範囲はおよそ10mで、この遺構からはやり状の石器（槍先形尖頭器）を中心に3,000点を超える石器が出土しました。周りを囲む丸い礫は、住居を覆っていた毛皮などを押さえるための「重し」ともみられます。石器づくりを盛んに行いながら、ある程度の期間にわたって居住した施設と考えられています。

旧石器時代の住居が確認された例はめずらしく、遺跡は国の史跡となって保存されています。



9 住居状遺構の復元模型  
(史跡田名向原旧石器時代学習館所蔵)



10 田名向原遺跡で確認された住居状遺構(柱穴:黒・炉:赤に着色)

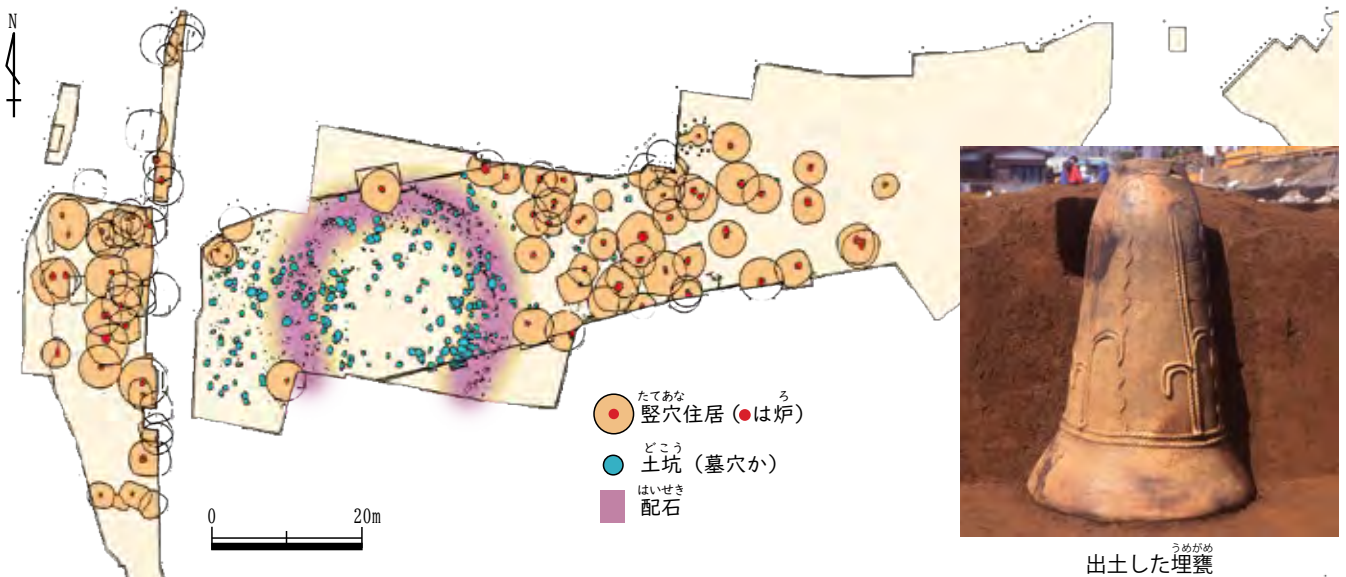






## 川尻中村遺跡

相模原市緑区の川尻中村遺跡は、相模川の段丘縁辺に立地する、縄文時代中期を中心とした遺跡です。新小倉橋の建設に伴い、対岸の原東遺跡とともに発掘調査が実施されました。調査では、墓地とみられる中央の広場をぐるりと住居が囲む「環状集落」が確認されました。



14 川尻中村遺跡 遺構平面図

縄文時代中期の末ごろから後期の中ごろ（約4,000～3,500年前）にかけて、神奈川県域では床面に平らな石を敷き詰めた敷石住居や、大規模な配石といった、石を多用する文化が盛行します。山梨県域もその文化圏に含まれ、敷石住居や配石、土器などに共通性が認められます。

相模川は、これらの文化の通り道のひとつとして、重要な役割を果たしていました。



15 相模川流域の縄文時代後期の遺構

- (左上 相模原市緑区はじめ沢下遺跡の敷石住居)
- (左下 山梨県大月市塩瀬下原遺跡の敷石住居)
- (右上 相模原市緑区はじめ沢下遺跡の配石)



## コラム1 さがみ縦貫道路の発掘調査

相模川沿いの遺跡の様相は、これまでの発掘調査の積み重ねで少しずつ明らかになってきました。その解明を大きく前進させたのは、さがみ縦貫道路の建設に伴う発掘調査です。

さがみ縦貫道路とは、首都圏中央自動車道路（圏央道）のうち、茅ヶ崎ジャンクションから神奈川県・東京都境までの34kmの区間で、茅ヶ崎市西久保から西進し、寒川町宮山で相模川東岸に出ると、そのまま相模原市緑区小倉まで川に沿って北上し、津久井湖の東側で相模川から離れて高尾山方面に抜けていきます。

さがみ縦貫道路の建設に先立ち、建設予定地内の埋蔵文化財（遺跡）の取扱いについての調整が始まったのは1992年で、1997年の茅ヶ崎市上ノ町遺跡を皮切りに、道路建設によって影響を受ける遺跡の発掘調査が始まりました。調査は、インターチェンジに接続する道路なども含めると、4市1町の22遺跡で実施され、調査面積の合計は19万5千㎡に及びます。さがみ縦貫道路が全線開通した2015年以降も、調査の成果を記録として保存し、公表するための発掘調査報告書の作成作業は続き、最後の報告書が刊行されたのは2018年でした。

刊行された報告書は30冊にわたり、出土品は4,500箱以上、確認された遺跡の時代も旧石器時代から近代までと、まさに「相模川の歴史」を語る重要な資料となりました。



16 さがみ縦貫道路関係 発掘調査遺跡位置図

17 さがみ縦貫道路関係 発掘調査遺跡名一覧(番号は上の図に対応)

番号	調査遺跡	番号	調査遺跡	番号	調査遺跡	番号	調査遺跡
1	はじめ沢下遺跡	7	葉山島中平遺跡	13	河原口坊中遺跡	19	倉見川登遺跡
2	畑久保西遺跡	8	当麻遺跡	14	城際遺跡	20	宮山中里遺跡
3	津久井城跡	9	上依知上谷戸遺跡	15	社家宇治山遺跡	21	宮山台畑遺跡
4	小倉原西遺跡	10	宮ノ越・宮ノ前遺跡	16	中野桜野遺跡	22	上ノ町遺跡
5	大保戸遺跡	11	桜樹古墳群	17	跡堀遺跡		
6	小保戸遺跡	12	中林横穴墓群	18	倉見川端遺跡		



## 2 川のほとりで暮らし始めた人々

### ▶ 稲作がやってきた弥生時代

弥生時代は稲作をはじめとした本格的な農耕が日本に広まり、根付いた時代です。水田で米をつくるには、豊富な水と土地の整備（水田設備）が必要になります。それまでの生活の場だった丘陵や台地上ではなく、川のそばの沖積地や谷戸などを開発する必要が生じたことで、生活の場も川沿いの自然堤防上などを選択する人々が現れました。

関東地方南部で本格的に稲作が始まったのは、弥生時代の中ごろ（約2,200年前）です。小田原市の中里遺跡では、先行して稲作文化を受け入れていた近畿・東海地方など、はるか西の地域の土器や石器が出土しています。稲作はこれらの地域から、水田をつくる技術や道具、まつりなども含めた、文化そのものとしてもたらされました。

この時期の近畿地方の土器などは静岡県内では見られないため、中里遺跡への稲作文化は、海路でやってきたようです。海からきた新しい文化は、さらに川をたどって上流側にも伝わりました。相模川もそうした文化の道のひとつであり、川沿いの遺跡からも近畿地方の土器が出土しています。

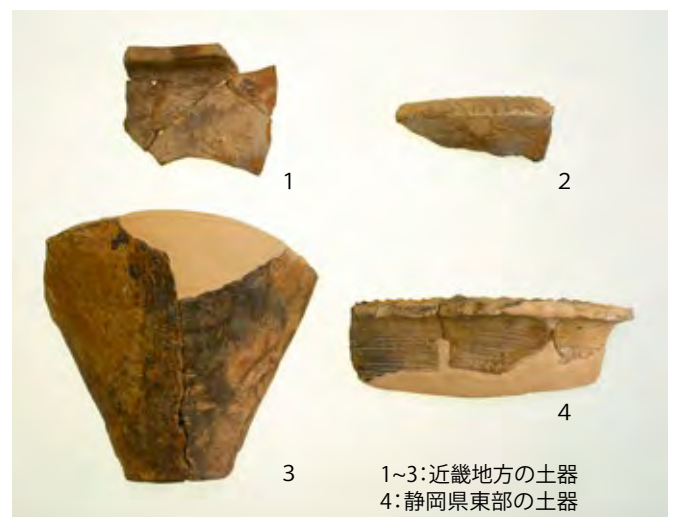
### なかのさくらの 中野桜野遺跡

海老名市の中野桜野遺跡は、相模川の自然堤防上に立地する遺跡です。中里遺跡と同じころの遺跡で、地元の土器に加えて、近畿地方や静岡県東部の土器が出土しました。

残念ながら、調査範囲の中では住居などの遺構がほとんど見つかっておらず、どのような性格の遺跡なのか詳しいことはわかりませんが、相模川の形成した低地を利用して水田を営んでいた集落だった可能性があります。



18 相模川周辺の弥生時代・古墳時代の主な遺跡



19 中野桜野遺跡で出土した他地域の土器  
1~3:近畿地方の土器  
4:静岡県東部の土器



稲作を受け入れた後も、川は変わらず遠隔地とつながる重要な交通路であり、自然堤防上には点々と弥生時代の遺跡が分布しています。また、川の合流点は、他地域からやってきた文物と、支流沿川の文物が集まる重要な場でした。

かわらぐちぼうじゅう  
河原口坊中遺跡

海老名市河原口坊中遺跡は、鳩川・中津川・小鮎川が相模川と合流する付近の自然堤防上に位置し、弥生時代以降、現代にいたるまで連続と続く生活の場となっています。特に弥生時代には、鉄製品や銅製品などの希少品が多数出土し、遺跡が重要な場所に立地していたことを物語っています。また、当時、遺跡内を流れていた川（旧河道）の中から出土した農耕具や工具、紡織具（機織具）などのおびただしい数の木製品は、私たちが想像する以上に当時の人々がさまざまな道具を使いこなしていたことを教えてください。



20 河原口坊中遺跡遠景(西から、赤色部は遺跡範囲)



21 河原口坊中遺跡の旧河道推定位置(左)と旧河道内で確認された「しがらみ」(右) しがらみは、水流を弱めるために杭を並べて打ち、間に木などを渡したもの。



22 鉄製品・銅製品



23 木製の高杯





24 紡織具



25 機織のようす(想像図)

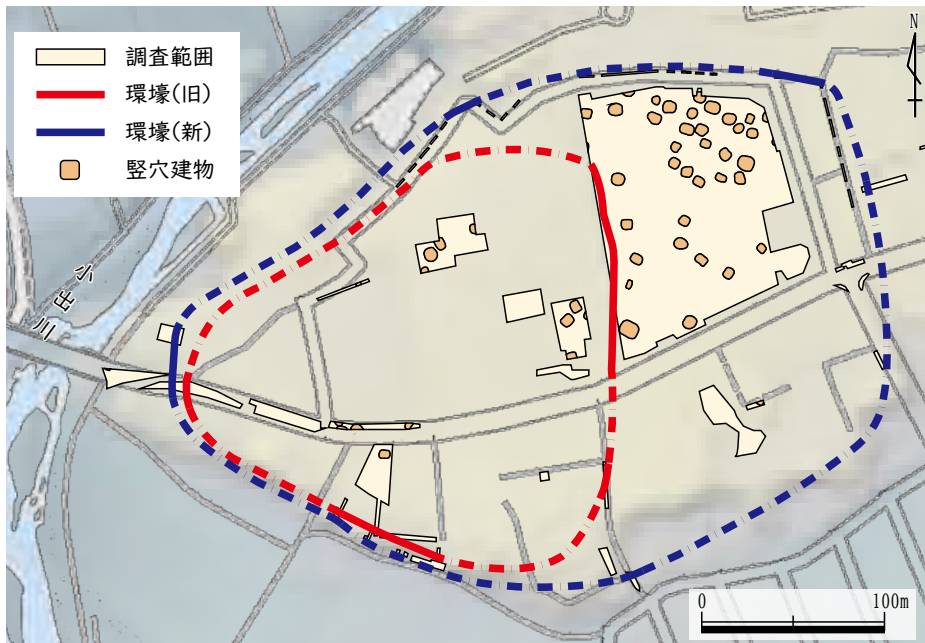


26 臼と豎杵



27 臼と豎杵での脱穀  
(『福富草紙(模本)』(部分)東京国立博物館所蔵)

一方で、相模川のように大きな河川沿いの低地だけが重視されたわけではありません。縄文時代と同じように、中小河川にほど近い台地の縁辺部などでも大規模な集落が形成され、海老名市の本郷遺跡や、茅ヶ崎市の国指定史跡下寺尾西方遺跡では、銅製品や鉄製品が出土しています。地域の中心となるような集落の場所は、水利や河川交通・陸上交通など、様々な要素から選択されていたと考えられます。



28 下寺尾西方遺跡の遺構平面図(左)と環壕(右)

下寺尾西方遺跡は、小出川に面した丘陵の先端部にある弥生時代中期後半(約2,100年前)の集落遺跡です。周囲を溝で囲んだ環壕集落で、その集落範囲は当時の南関東で最大級です。



## ▶相模川周辺の古墳時代

古墳時代になると、「中央」と「地方」という関係が生まれます。近畿地方のヤマト王権が中心となつて各地域の有力者たちとの結びつきを強め、前方後円墳に代表される大小の古墳と、銅鏡・武器などの古墳への副葬を特徴とする古墳文化が全国的に広がりました。

### 古墳時代前期・中期の様相

相模川沿いでは、海老名市社家宇治山遺跡などで玉づくりが行われています。また、銅鏡などの希少品や、5世紀ごろに新たに入ってきた須恵器などが出土する状況から、弥生時代と同じく、川が他地域と文物をやり取りする道のひとつとして機能していたことがうかがえます。



29 住居内から出土した銅鏡(寒川町倉見川端遺跡)



30 社家宇治山遺跡出土の玉づくり関係遺物



31 5世紀の中ごろに伝わってきた須恵器

古墳時代の名のとおり、相模川周辺にも前方後円墳や前方後方墳などの古墳が築かれます。古墳時代前期(3~4世紀ごろ)の古墳は、海老名市の国指定史跡秋葉山古墳群や平塚市の真土大塚山古墳のように、地域の支配者にふさわしい眺望の良い場所や、交通の要衝などにつくられるものが多くあります。

一方で、集落に隣接する場所には、弥生時代から引き続いて周りを溝で囲んだ墓(方形周溝墓)がいくつもつくられました。立地や副葬品などからみて、大規模な古墳に葬られた人とは大きな格差があったようです。



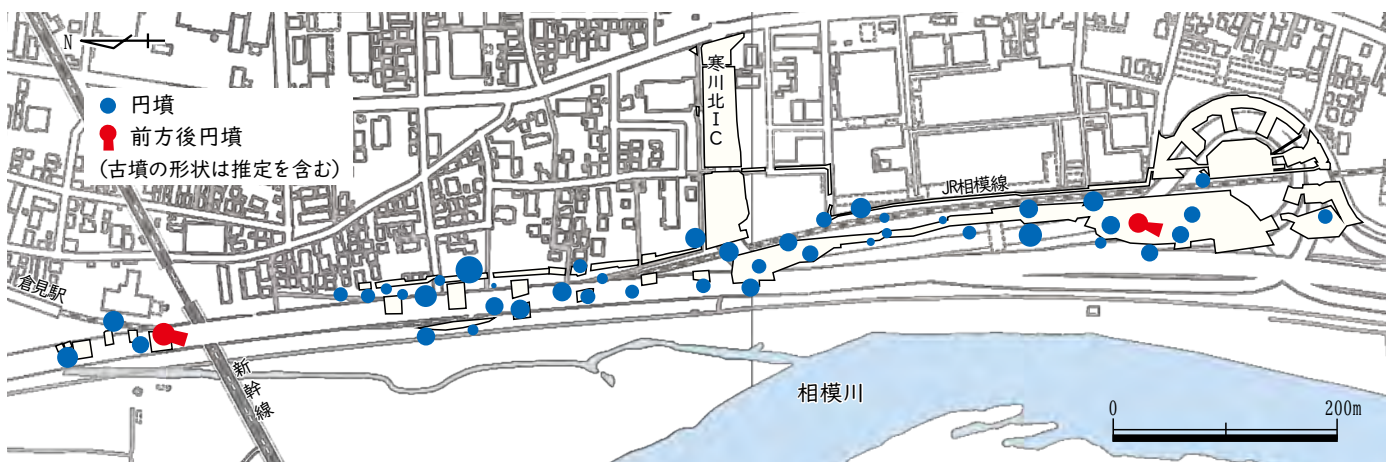
32 社家宇治山遺跡の方形周溝墓群



## 古墳時代後期の様相

古墳時代後期（6～7世紀ごろ）になると、川沿いの自然堤防上や河岸段丘面にも、小規模ながら円墳を中心として数多くの古墳がつけられます。そのような古墳群の中には、寒川町宮山中里遺跡のように前方後円墳を含む一群もあります。鉄製の武器や装身具など豊富な副葬品が出土した古墳もあり、同じ古墳群の中でも、かたちや大きさに差がある場合もあるため、一口に古墳に葬られた有力者といっても、その力には差があったようです。

自然堤防上では、後世の耕作などで上部が削り取られて、古墳を区画する溝だけが残っていることも多いため、どのような人が葬られたのかははっきりしない点もありますが、川沿いの集落で河川交通を統括していた人々の墓だった可能性も考えられます。



33 自然堤防上につくられた宮山中里遺跡・倉見川端遺跡・倉見川登遺跡の古墳分布と前方後円墳空撮写真



34 河岸段丘面の古墳群(厚木市桜樹古墳群)



35 河原口坊中遺跡で確認された小石室(上)と副葬品の玉(左)



### 3 古代のかながわと相模川

7世紀後半から8世紀にかけて、日本は中国の政治制度や文物を取り入れ、律や令といった法制度を整備して国家のかたちを整えていきます。全国に行政単位としての「国」「郡(評)」が置かれ、国・郡には政務をおこなう国府・郡家が設置されたほか、国々を結ぶ連絡道路と、その道に沿って馬を乗り継ぐための「駅家」が設けられました。また、8世紀中ごろ～後半には、各国に国分寺・国分尼寺が建立されました。

神奈川県内でも、相模国府(平塚市)、相模国高座郡家(茅ヶ崎市)・鎌倉郡家(鎌倉市)、武蔵国都筑郡家(横浜市青葉区)・橘樹郡家(川崎市高津区)、相模国分寺・国分尼寺(海老名市)といった官衙(役所)や寺院の遺跡が発掘調査で確認されています。

#### ▶官衙関連遺跡

国府などの官衙遺跡では、整然と立ち並ぶ大規模な建物跡が見られ、文字を書くための道具や、美しい釉薬のかかった器などが出土します。

こういったものが多く出土する遺跡は、官衙に関連する、あるいは官衙に勤めていた人々が生活していた場所の可能性ががあります。



36 相模川周辺の古墳時代後期～平安時代の主な遺跡



37 国庁協殿と推定される大型建物(平塚市坪ノ内遺跡)